

淨

土

特輯

勤勞と信仰

造久



十月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十八年四月二十八日運轉開始
昭和二十八年九月廿五日印刷
昭和二十八年十月十五日發行

第十九卷

十月號

勤勞特集號によせて

時計はチクチク分秒を刻んでゐる。河には水が休みなく流れている。雲が東に飛ぶ。月が傾く。正に世界は動いている。法句經に

「命欲日夜に盡く、時に及んで勤力すべし、世間は諦かに非常なり、迷いて冥中に墮するなかれ」

この常ならぬ世にあつて、己れのみ常なりと思う胸に怠け心が湧く。昨日の自分は今も早や今日の自分でなく、今日の自分は明日の自分ではないことを知るなら、どうしてちつと手を拱いていられよう。津波のように背後から迫つて来るものがある。それがみえるか、みえないか。みえれば人は自づ勤精進の佛道を進み、みえずば快樂怠惰の淵に沈む。

勤勞とは精進である。いや精進のない勤勞は勞苦にのみ終る。勤勞というとすぐ蛾や蜂の姿が思ひ出されるが彼等の働きには精進の裏づけがない。人間の働きとは、少くとも斯る意味のものであつてはならない。精進でなければならぬ。肉體的と同時に精神的な、個人的である一面社會的な——勤勞でなければならぬ。孝經抄に「人の爲さんと欲する所は、譬えば池を穿つが如し、之を掘りて止まざれば、必ず泉水を得」

泉水とは涓々と水の湧き、弘く世間を潤おす、知慧の源である。自分一人の渴をいやすためのものではない。

(竹中)

浄土 十月號 目次

子供の智慧……………吉田絃二郎(1)

北邊開教……………石上博(30)

臺灣とセイロンの佛教……………杉本信雄(28)

「働く人と信仰」實態調査……………(14)

「働く人と信仰」アンケート……………(20)

念佛信仰と勤勞……………佐藤密雄(10)

働く人々を訪ねて……………編輯部(22)

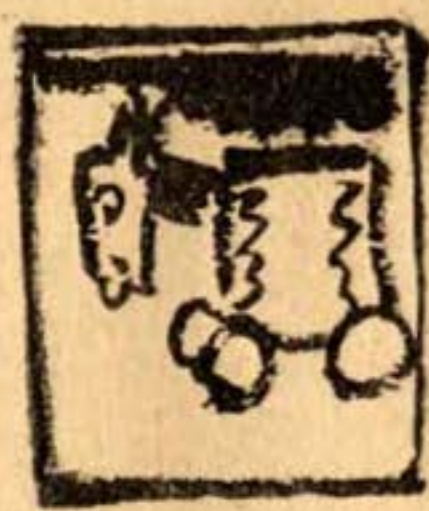
勤勞と秩序(府中刑務所)……………(25)

お十夜二つ……………(8)

隨想二題……………齋藤昭俊(32)

光と音……………(19) 書評……………(27)

心月影……………村田嘉久子(4)



子供の智慧

ま田 結子

芙蓉が咲き、百日紅が咲くころとなつた。

また今年も生きてこのありがたい日本の秋にめぐり逢ふことができたかと思ふとうれしい。

秋は隣りさかひの垣根に數株のコスモス紫苑菊の花を咲かせることによつても、おのづと隣り人との間にあたゝかい心の融け合ひを感じさせる。

鶏頭、小菊、中菊など楚々たる秋草で境をしてゐる隣り同志の住まひは見るからに氣易く、そこに住む人々の心にもゆかしく偲ばれる。

石鐵の門高く、堀いかめしく構へたのではまがきの秋の草花の美しさを見るすべもなく、秋が訪れても冷たいうと

うとしさのみがそこに住む人たちの心を支配してゐるやうに感じられる。そんな邸町を通りかゝると、こっちの心までが冷たくなるやうな氣がする。

わたくしの子供のころは田舎の家では何處でも幾分かの畑を持つてゐて、春秋の彼岸には畑の一部に草花の種子を蒔いた。そして花の種類にはかならず佛さまに供へる花を加へることを忘れなかつた。いや、花畑そのものは佛への供花のために作られるものであつた。秋から冬への供花としては鶏頭、紫苑、百日草、蝦夷菊、小菊、中菊などが植ゑられた。

八十八夜にはかならず菊の根分けをすることになつてゐ

て子供たちは秋になつて佛さまに供へる菊のすがすがしい姿を小ひさな胸にゑがきながら菊を植ゑる手傳ひをした。

また子供たちは、秋になれば草山にのぼつて、桔梗や女郎花や姫百合や、川原撫子を手折つて來て佛に供へた。子供たちは美しい花は佛さまをよろこばせるために咲くものだとか考へてゐた。

子供たちは佛さまをよろこばすために花畑を作るのだと思つてゐた。

近年、子供たちはさまざまの花を手折つて學校に持つてゆく。そして科學的な研究の材料に使ふ。使つてしまつた後では花瓶にでもかざらるればいゝ方で、大方は心なしに捨てられる。冷たい科學的な物の扱ひ方だけでは子供たちの心は救はれない。

四月五月になれば多磨の田圃にも蛙が鳴く。そのころ田圃を歩いてゐると蛙を捕へては地に叩きつけてゐる子供たちを見る。子供たちは學校へ持つて行き、蛙を解剖して生

物學的研究をさせられるのである。

科學的研究も必要である。しかし蛙を殺し、蛙を犠牲に供する行爲が、子供たちの純な心を傷つけることのいかに大きいかといふことも考へて見なければならぬ。

近ごろの世代の人たちは科學的に、唯物論的にのみ人生を觀ることを教へられてゐる。しかし同時に幽玄な世界について思惟することも忘れてはならない。悠久無限の世界なくして何處に有限の人生があらう。

わづか一寸二寸の草といへどもその根は無限の實在にながつてゐる。わたくしたちは一片の草の花はそれ自身の有限の花片に生きてゐると考へてゐる。しかし一片の花片は幾億萬里をへだつる太陽との因果關係に於いて生きてゐる。さらに太陽よりも遙かに遠い幾億光年の星との關係に於いて生きてゐる。

秋が來て、幼い學校の子供たちは小ひさなバスケットを提げて歩いてゆく。子供たちを見れば、誰れでも微笑まし

い氣持ちになる。わたくしたちの人生に花があり、太陽があると同様に子供たちがあることに依りて人生は救はれる。

子供たちはまことの智慧を持つてゐる。まことの佛神の言葉を語る者は子供である。菩薩の手の美しさも、菩薩の目の美しさも、子供たちのものである。

この子供たちの智慧を光を晦ませるものは大人の世界の浅薄な常識であり、父や母の虚榮心である。

わたくしはこのころはじめて、しみじみと子供の字のよさを感じるやうになつた。

子供の書いた字は上手下手を絶した味を持つてゐる。上手は上手なりによく、下手は下手なりに書といふものゝ味を持つてゐる。

これは大人の場合も稀に見出すことがある。山樵漁夫といふやうな文字の生活とは縁遠い人や、滅多に字を書かぬ臺所の女たちの字に面白い味のあるものを見出す。そんな

人たちは子供の心を失はないでゐるからであらう。
一文不知のともがらにならなければまことの信仰の味もわからないのであらう。

掲 示 板

一切の衆生は

皆精進によりて興起するを得

家に在りて精進なれば

衣食豐饒にして居業廣く

遠近これを稱嘆す

家を出でて精進なれば

行道皆成じ

生死の流れを渡り泥垣の岸に至り

無爲安樂なり

影　月　心

—舞台と信仰—

村田嘉久子



信仰を持つものの強みは、いつ、如何なる場合でも、落着いて居られる、一種の諦観（あきらめ）というようなものを持つて居られるということ、ではないかと思ひます。

私などはまだなか／＼、信仰心がそこまで行かない故か、樂屋内で、不愉快な事柄に打突（ぶつ）つたりしますと、すぐ口惜しくなつたり、恨めしくなつたりしますが、それこそ自分が至らない證據だと、反省させられます。そこに信仰の尊さ、ありがたさがあるのだと考へます。

昨年大病した原因も、そうした事でしたが、其代り、又ありがた事に信仰のお蔭で、もう駄目だと言はれた體を助けていたよきましたから、矢張り信仰というものはどうしても持つべきものだ、其時もしみ／＼と考へた事でございます。

只不思議な事に、芝居などでは宗教を取り扱つたものは例外なくと言つてもよい位、いつも失敗に終りますが、これはどういうものでしょうか。

勿論劇場側でも、そんな場合、宗教側だからと言つて、それを重く見るよりも、かえつて軽く取扱うからかも知れませんが、観る方も何かありがたさを押付けられるみたいで、興味がなくなるのではないでせうか。

こんな事がありました、終戦直後、半興行的、半慰問的に、誘はれて九州を十月から十二月に掛けて三ヶ月の旅に参つた事がありま

した。その少し前に、天理教の支部長のやうな方からの依頼で、大和の天理教の本部で、秋の大祭があつて、大變な人出ださうで、この機會に是非參詣がてら、又見物がてら、この巡業に先立つて、五日間ほど其處で演つてほしい、と言う事でございました、此方では丁度九州へ行く前でもあり、悪いけれど、舞臺けいこのつもりで、丁度良いから、と引受けました。ところがそれでは九州へ持つて行く芝居だけでは意味がないから、と別に「大和唄」という天理教主中山みき女の傳記のやうな芝居を特別に二幕演る事になりました。その芝居は一流所ではありませんが、東京でも評判を取つたと言う芝居でしたので、皆ものはり切つて引受けました。

筋も大變よく出来て居るのですが、此劇中大切な處は、中山みき女が自分の子と、村内（そんない）の庄屋（しやうや）の子と、兩方を抱いて乳房を吞ませる處ですが、其主人公を女優である私に演るやうお話がありました。

處で脚本を拜見しますと、其中に法然上人を大變けなしで居る處があります。只今の私でしたら、そうした事にこだわらなかつたかも知れませんが、終戦直後で、而も私は、本山増上寺で、加行を済ませたばかり、生々しく法然上人の御事柄を頭に詰め込まれて居た頃でしたから、早速抗議を申込みまして、こゝのセリフを變へて下さらなくては御引受け出来ない、と申したのでございます。

ところが、先様にすれば其處が大切な處、訂正する事は出来ないというのでした。まあごた／＼あつて、面白い事には、それを私の

處へ納めに來られた一座の俳優さんが、御自分がそれを演りたかつたらしく、只私へは義理合ひ上お話があつたまでで、結局御自分で引受けてしまいました。其代り、全々出演しないと角（かど）が立つから、と言うので、私は端役の、その乳が出ないで貰ひに行く庄屋の若女房を引受けて演る事になりました。

さていよいよ大和天理へ出發しますと、秋の大祭の人出というのは大したもので、毎年四五十萬は下らない、と言う事です。全く人と人で道が歩けない程でございました、ところが、其芝居は全々失敗でございました。否、芝居はよい筋で、面白く、非常に泣かせる處もあつてよく書かれて居るのですが、お客が全々そつぽを向いて居るみたいなのです。よく／＼調べて見ると、宗祖中山みき女は神様だ、神に近い人の事を劇に仕込むなんて……と信仰する人々はむしろ大憤慨だという事が解つて關係者一同、然としてしまいました。

そんな譯で入りも初日には少なかつたので大あわてで、二日目からは係りの人が、學校とか、各團體とかへ呼びかけて、客席は一杯になりましたから我々はちつとも嫌な氣持はなく、又別の狂言は全部九州へ持つて行くものを挿入れて演るのですから、少しも心配する事なく、無事五日間を打上げました。其大祭を當込んで宗祖の繪はがきを何十萬枚かを造つた寫眞やさんが、ほとんど賣れなくて大變な損害だつた、と言う事も後で聞きましたが、すべて意外な事で

ございました。

さぞ大した當り方をするだろうと思われた計畫が美事はずれたというのも、それこそ、信者の言う、宗教をだしに當りを取らうとした人達に罰が當つたのかも知れません。

東京でも昔、道了様の芝居を信者が約二萬人の見物を引受けるからというので、松竹さんに持ち込みましたところ、松竹さんも、早速上演した、ところが急に何の手違いからか其三分の一にも足りない見物しか来なかつたというので、大變弱られた事があつたと聞きました。が、よほどうまく仕組まないと、そして頭から宗教劇だと、思わせないやうな、やり方でないと、失敗する事が多いのでございます。つまり一部の信者によくつても、一ばんの客受けがよくないという事になるので其點なかくむづかしい事だと思ひます。

そうかと思ひますと、十八年ばかり前、信州地を巡業に行つた時、信濃五ヶ所だけ、特別に挿入れた狂言を演つて廻つたことがありました。これは興行主から特別の依頼で、その狂言を入れなくては、どんな良い芝居でも人が来ない、と信じ切つて居る劇なのです。これは親鸞聖人を扱つた劇ですが、この時は私は觀音様の化身上臈ろうの役を致しました。大した筋でもないのに見物は非常に興奮してお賽錢を雨のように舞臺へはつたりしまして、大入満員で喜んだ事がございました。

すべて宗教劇はむづかしいものだと思ひます。其他に矢張り終戦

直後、僅かの人數で、私が主となり、ほんの半月ほどあちこちと、

慰問半ば興行に近縣を廻つた事がございました。其時、私は法然上人の御講議を増上寺で受けたばかりで、私の好きな上人のお歌「月かげの至らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ」を主にして何か宗教劇というものでない、誰れにも解る、そして觀た後で何か教へられるものがあるやうな芝居が演りたくて仕方がなかつたので、それを、丁度其時興行に關係して居られた北里俊夫さんという新進作家の方に、無理にお願いして書いて頂きました。それを「月影」と題して二幕四場として、私は劇中主な役の母親と、毒婦の二役を演らしていただきましたが、この劇は戦後の混沌とした青年の氣持がよく書かれていて、其父を騙だまして自殺させてしまふ毒婦を敵と思ふ我子と、それをいさめる母親、優しい妹など、出て來るので、それを茶屋の場などあり、色氣もあり、賑やかさもあつたとも宗教劇のようには思はれませんので、お客は面白がつて見て呉れます。

劇中母親が息子に敵と思うな、畢竟だまされた父親が悪いので、相手を殺せば又お前が敵とねらわれ、………というやうなセリフのある處が劇のヤマなので、私のミソでもあり、多分一人よがりの處もありましたけれど、どこの芝居小屋へ行つても評判を取りました。或る處の興行主は「月影」では一寸外題が輕いから「心月影」としては如何でしようと、それから「心月影」と訂正して打つて居りました。飛彈の高山へ行つた時など、打上げて宿へ歸りますと

その小屋主の方が見へて、大變嬉しい事をお知らせに上りましたと言ふのです。聞いて見ますと、芝居がハネてから一人の男のお客様がわざわざ自分に遇ひに来て「この芝居は明日もあるのですか」と聞くので「もう今日だけで明日はありません」と言う、「あゝ残念な事をした、實は近頃の芝居は、顔の赤くなるようなものが多くなつて、とても子供や、家族連れでは觀に來られない、私は前に懲りた事があるので、今日も實はそつと、一人で見物しに來たのですが、あんな芝居なら家中皆に見せてやればよかつた、明日あつたら皆を連れて來ようと思つたのに、それは残念だつた、」と歸りました。

私もいろ／＼芝居を掛けたけれど、すんでまでわざ／＼お客が感心しに來て呉れたのは始めてです。私も非常に良い事をしたように嬉しかつたので早速御話に伺ひました、と言うのです。私もこれを聞いて本當に嬉しい氣が致しました。

自分の成功した事を、申上げるのは心苦しい事ではございますが、其時その小屋主が是非今後もある、後味のよい芝居を觀せて下さいと、最後に言つた言葉が、今もハッキリと私の頭に残つて居て忘れられないので、ちよつと書き添えてみました。

(演劇女優)

えー何と申しますか、私共はもつばら、餅を搗つてばかり來たものですから、口下手ですがね、この萩の餅が、こんなになんで老舗の筆頭にのし上つたのは、この小さい所にあるんでしような。親指半分位のところが、一寸粹なんで、これが、小豆のと、黄粉のと、のりのとが、並んでいろ色の配合が又受けがよいようすな。

お客はとくにどこつてないので、萩の餅といえは當店ということでして、強ひて申せば新橋銀座の粹筋でしような。形の小さいのも關係がありましよう。東郷さん時代には、よく水交社に出張して、お上の口にも召上つてもらつたものです。

まあ餅を搗つて三十年、十分間に二百五十個という所。もつとも外じやこの技術は使う所がないですよ。其だけに獨特なんでしょう。

秘傳はないかとおつしやるが、別に何もありませんよ。原料を夫々精選して、あんこは小豆を二時間、皮のわれた所をざるでこし、布で水をきり、小豆一合に砂糖五十匁、きなこもちは黄粉一に砂糖三、のりもちは篩をかけたこま一に砂糖四と黄粉少々、割、御飯の熱い中にまぶす方がよろしい。

當方で五代、初代は汐留の大名屋敷出入の荒物屋でしたが、例の御維新で、其方がばつたり止つたので、之を思いついたのが、そも／＼。一寸した思いつきと多年の努力と誠實がこの名代の胡萩堂なんです。

新橋 胡萩堂 金子氏の話

お 十 夜 二 つ

眞鶴 西念寺の十夜

——町の秋まつり——

十六夜から三晝夜
修せられ、唯にそ

の當番寺の檀信徒
だけの十夜ではな

く、町の氏神の例

大祭と併び、町民

全體の秋の佛まつ

相模の小江戸と云はれた眞鶴の町には淨土宗の西念寺、發心寺と、曹洞二ヶ寺との四ヶ寺があつて禪淨一致、實によく融合して教化の法要も一寺一家の様に取り運ばれてゐる寔に珍らしい和やかな處である。

その一つの現れとも云うべき淨土宗の十夜

法要は四ヶ寺の住職總出で勤められる。十夜

は西念寺と發心寺と一ヶ年交代で舊曆の九月

りであるために、終戦前迄は町の青年團員が義務奉仕で三門側に堵列して高張提灯を點けて參詣の警備に當り交通、風儀等いやくも法要の嚴肅さを亂すような高聲喧嘩の輩や、公安を害する行爲をなす者があれば見當り次第之を制止して襟を正さしめたものである。

十夜法要の日取が發表されると、昨年の十夜から今年の十夜前迄の新亡の佛のあるうち

では、肉親はもとより親戚、朋友、知人と云つた縁ある人々から、お十夜に誂誂をあげて下さいと云つて幾何かの志を頂く、それは縁と恩義の濃淡によつて三晩連續回向から二晩一晚と云う風に黄白の内容が相違している。交際の廣いうちだとか血族の多い家では一靈に對して數百通の誂誂回向をあげて頂くのは珍らしくないことで、反對に又志を出す方もあちらのうち、こちらの佛と出費も仲々かさむようである。

斯くして新亡のある家々に纏められた誂誂の申込は十夜の始まる前日の朝から續々とお寺へ持ち込まれる、帳場には豫め四ヶ寺の過去帳の寫が用意されており、町内四ヶ寺の住職がそれ〴〵筆の達者な助手を従へ、總代世話人等が席を列ねてこの申込を受けるが、これが三ヶ日の法要の終るまで續くのだからその申込數も夥しい數に上る。受付けたものを制式に清書する者、清書されたものを施主の希望によつて誂誂を贈回向に分類するもの、それを休む間もなく、風呂に汗を流す間もなく食事も交代で済ますと云う風に三晩不斷連續で回向する隨喜寺院、回向の済んだ分を處

理するもの等、それ〴〵の係の者の協同奉仕で法要は運ばれるが、法要と云つてもお説教の時間もなければ眠け覺しの餘興一つ入れる時間など勿論ない、諷誦と贈りの哀調を帯びた和雅の妙音に秋の夜は靜かに更けて行く。

一方參詣人の方はと見れば、縁者から諷誦の志を受けた施主は勿論のこと一般の參詣人も夕方早くから詰めかけて、老人等は、嫁の役目として運んでくれた毛布に秋風を凌ぎ、夕食の辨當を食べながら、自分の佛に上げて頂いた回向を、夜の更けるのも知らぬげに聴きとれている。最後の夜は、豫定されたものと前二晩のうちに回向の出来なかつた分と一切合切の總回向だから回向の終るのは大慨明け方の五時頃になるのが例で、それが終れば農期回向が修せられて結願となる。

一氣に睡氣を拭ひ去つた壯嚴爛爛の結願回向に隨嘉の涙を流し心の垢を落しつゝ、おこもりの善男善女は佛佗の光明にも似た朝日の輝を全身に浴びながら三々五々と下山して行く。十夜が終ればつゞいて迎春の心がまへをするのが家々の習はしのである。いつの頃から初められたものか詳でないが二ヶ寺交

代制の十夜法要を町の先祖の秋まつりとして町の年中行事の首位に育てあげた先祖の着想に寔に敬服すべきであり又、其町にしつくりと充てはまる行事である。(了)

(小俣眞誠)

八王子十夜

八王子市大構町の大善寺は、その三代吞龍上人が子育吞龍上人として餘りにも有名である。ここの十夜は開山讃譽上人が天正十九年に十夜をはじめられてから、年々盛大を極めております、十月十三日から十五日まで、三日三晩勤修され、各宗を問わず、近縣十里四方からの參詣がある、境内にはサーカス其他の興行多數がかかり露店等數百もが出て、大した賑ひを呈します。三日間の群參は實に三十餘萬を算すると云われ、廣い境内も身動きのならぬようになります。東京近郊では珍しい佛教行事の一つとして、今も盛大に行はれています。多摩車返しの本願寺等もその一つです。

十夜

秋のとりいれで、ほつとした十月、十一月の十五日前後の日、淨土宗の寺々で十夜念佛の法會が持たれている。所によつては、法會の後で各自夜のおとぎを持よつて、お互に進め合つたり、お寺で作つた甘酒に舌鼓を打つて和樂の中にお念佛を味つております。十夜と云うのは、お經に、この世で善を修すること十日十夜すれば、他方諸佛の國で千年するにも勝るといふと説かれてあるによつたもので、我宗の行事としては約八百五十年前鎌倉の光明寺の第八代祐崇上人が勅命により行われたのが初めてあります。

新維持會員芳名

田中 林助 (三重)
新保 義道 (〃)
戸川 靈俊 (京都)

特に戸川・新保兩會員におかれては十名以上の會員を多數御紹介下され、同信の喜びを多くに分つ事を喜ばしく存じ、且は御禮申上げます。

法然上人鑽仰會

念佛信仰と勤勞



(一)

念佛信仰が直接に勤勞精神をたかめると言ふことはない筈だと思ふ。

それは、信仰と病氣とが直接關係がないと言ふのと同じことである。

然し乍ら念佛の信仰の盛んな地帯は勤勞精神のたかい地帯であることも事實である。

古來都會の職人階級の宗教は題目だと言はれて居るが、此に對して、漁村と農村地帯の大部分は念佛信仰である。

私の生母は北陸富山の農村の出身であつたが、老年になつてもじつとして居ることが出來ず、庭や畑の草取りの如きことをし、其勞をねぎらはれると、「如來様のちようさい永劫の御苦勞を思へば、遊んで居てはごもつたいたい」と言うのである。

どんな苦勞をして、も、阿彌陀佛が衆生を助けんと心を碎かれる御苦勞に較べては、ものゝ數ではないとして、死ぬ迄何かを働きつゞけることが、人のつとめと心得へて居たらしい。

然し念佛信者の「もつたいたい有難い」は勤勞へのみ向ふものではなく、何かにつけ、不平を感謝にかへて進ませるものである。

母は死ぬ時はちようがんの手術をしたが、その折も、此のいたみを超えて來いと如来の有難い引寄せであると手術のいたみを感謝の念佛でたえつゞけて居た。

「もつたいたい」と「ありがたい」との二つの言葉は淨土教徒が佛への感謝をば生活の困苦に振り向けて行くものであつて、念佛信者の生活信条若しくは態度をなすものである。

念佛する人々に取つては、勞働の時間も體力も佛から頂いたもので、働けることが「ありがたい」と感謝され、不實にすごすことは、「もつたいたい」佛のからひを無駄にすることになる。

念佛すれば、それだけで佛の助けを受けて居るのであつて、此の外に特別に祈りをしたり、修法をしたりしなく共、働けばよいのであるから、時間も體も働けとて佛から頂いたものであると感ずるのである。

充分に役立たなくては佛様に申譯けがないと言ふのである。

北陸の農村は一年の半分が雪でおほはれる。だから植物でも動物でも、晩春の雪どけと共に非常な勢ひで活動を始める。日照りは一

佐藤 密雄

刻と雖も「もつたいたい」のである。働ける日こそ「有難い」のである。北國に夏を旅する人は、植物の新芽ののび方のすごさや、木の葉のみどりのきらきら輝く美しさに驚くのであるが、此は長過ぎる冬眠を越して來た植物が、短い夏期に一年分の光線を一きよに吸ひ込み、一時に育たうとして居るからである。植物にとらず昆虫も活躍するし、農民達は此等動植物よりも更に眞けんである。種まき植付、草取りを續けるとちきに八月盆を迎へる。盆に一いき入れるともうちき刈込になる。法然上人の仰せられた「働き乍ら念佛する」生活をする外に、宗教のもちやうのない人達でもある。

他力を頂いて居るから、生きる仕事をさせて頂けるのである。「こもつたいたい」佛のお力で働くことの出来る氣持が、「ありがたい」と仕事に感謝していきまして呉れる。長い冬は、雪の下で、婦女子は「わら」を打ち、男はそれで「わら工品」をつくる。雪の解けた間は息つくひまもなく土に働くのである。人々は、働きつゞけ乍ら金銭的な恵みには極めてうすいのであるが、それにもめげずに働き生きるのは、念佛信仰が生きる喜びの支へとなつて居るからである。冬の夜に訪れた檀那寺の和尚様をば「あろり」の横座に据えてわらを焚きながら一家が法をきき、社會の動向やそれに對する意見をも聽聞し居るのは、北國の家庭信仰風景であつて、寔に美しい圖柄である。此は十二月から三ヶ月間になされる眞宗や淨土宗のお寺の農山村の檀信徒廻りがめぐつて來た夜の有様で、眞宗では報恩講（ほんこ）廻りと言ひ、淨土宗では御忌の御取越（おとりこし）廻りと言ふのである。雪のない間を働きつゞけた農家は、先祖の慰靈

から世界知識の吸収や宗教道徳への見る目に到る迄、雪ごもりの中でお寺さんから聽聞するのである。

(二)

私は先頃の戦争で召集され、熊本の兵舎で焼出された爲に、西南戦争で激戦のあつた植木から一里程入つた今藤と言ふ農村へ移され、そこで終戦を迎えた。八月十日から九月十三日迄此村の、村上さんと言ふ農家に私と併せて六人の兵卒が宿泊して居たのである。村上さんは、馬が二頭も居る農家で、家も古いが大きい。座敷には一間床の脇に六尺一杯の佛壇があつた。聞くと淨土眞宗佛光寺派の門徒で、此村はほとんどが同じ門徒である由である。戦争がはげしくなつてから、お寺さんのお参りがとだえて居るとのことと、私が軍のゆるしを得て、頼まれた數軒をお参りしたが何處の佛壇も立派で、金屬佛具の重量の多いのを自慢にして居る家も可成りあつた。

村上さんは六十を過ぎた人であるが、村長もした事があり、健康な働き手と言ふ感じの人である。奥さんは五十臺、長男は出征中、別家した二男三男も出征中であり、女學校を出た娘さんは勤勞動員で召集され工場の合宿に入れられて一週に一回程度歸宅する。小学校五年と六年の男子二人が家に居る。出征中の三人の嫁さん達は夫々實家が手不足で歸つて居るが、此が交代で老夫婦を見廻りに來て洗濯等の家の中の整理をする。村上夫妻と二少年は凡そ雨の降らない限りは一日中辨當持參で野良に出て働いて居るのである。

私は朝五時半に起きて讀經することにして居た。兵士は佛間に寝

かされて居たが一齊に起き出で、私が洗面して佛壇の所へ来る間に、室は掃き清められ、佛壇は開かれ、佛器には白飯が盛られ、輪燈には火が入つて居た。恐らく、村上さんが兵士が起出ると共に佛壇を開き奥さんが取急ぎ兵士の寢床のあとを掃き出すものらしい。私の讀經は阿彌陀經と發願文と念佛とであるからさして長いものではないが、其の間村上さんはずつと坐つてお参りして居て、念佛を唱和する。家の人々は朝の用の合間を交代で來てしばし禮拜して去ると言ふ風である。經が終ると村上さんから讀經のお禮と朝のあいさつがあり、奥さんは熱いお茶に梅干を添えて出す、讀經中庭光や土間の臺所で雜談して居た兵士も來てお茶を飲みやがて六時の軍の點呼の召集が聞えて來ることになる。この村のみならず近在の家庭ではすべて毎朝起き出ると佛壇を開き佛器に白飯を盛つて供え、一日中即ち家族が起きて居る間中佛壇の外扉が開かれてあり、ほこりの入るのを防ぐ爲に内扉だけが軽く閉されてあるだけである。そして家族が寢る前に交代で禮拜をして最後のものが外扉を閉するのである。佛と俱に起き出で、佛と俱に寢につく生活を、それとは氣付かぬまゝに行つて居るのである。農閑期には、朝又は夕に正信偈とお文章を讀むが、讀むのは一家の主人であると言ふこと。佛教の話は何をしても喜び、佛力の有難さを感じることに「ごもつたいたい」と言ひ、念佛する。時に、あぐらの雜談から佛法の話へ入つた私の方が行儀の惡さを恥ねばならぬこともしばしばであつた。

村上夫妻は相當の識見もあり、兵士がわいざつな談をして居る時には、その中から私を呼び出し、兵士等は宗教家の交るべき仲間では

ないから、自分の所でお茶を飲めと言ふこともしばしばであつた。政治運動の盛んな所らしく、政治に関する意見は度々きかされた。夫人も婦人問題について相當の意見のあるのに感じ入ることもあつた。圓滿な家庭らしく、一家揃つてだんらんする時には、「がらいもだんご」を作り、夫人が三味線を引き村上さんが歌ひ嫁子供達はやし立てると言ふ調子で、こんなことは二回程あつた。此の様な家庭が強い念佛信仰で農事をはげんで居る姿は、一寸都會では想像のつかないもので、尊いものとも感られた。

終戦後二週間程をすぎた頃の軍隊は、放出品取得に對する慾心と使役をさける怠惰心と復員命令の出ないいらだゝしさの交さくで、私もその一人であつたが、全くあさましい限りのものであつた。精神がちかんし汚れて來ると身體もだめになるのか、終戦後の二週間の内に、私共の中隊で三人の死者が出た。大ちようかたるで二人、かつけのしやうしんで一人が死し、三人の葬ひと火葬は僧侶と判然して居た私の役目であつた。私共の部隊は四十臺のものばかりで、家に妻子を残して居るのであるから、戦争中は逃げまわつても何としても生きて歸ると張込んで居たのであるが、それが終戦で死ぬ心配のなくなると共に病人がふへ、三人も死者が出たのであるから、精神のゆるみと言ふものゝ恐しさを見せつけられた様なものであつた。此様な日を過して居る一日、村上さんは自分の家に居る六人の兵にお酒を振舞つた。それ迄兵達は此地方の芋焼酎と言ふのを配給されて珍重して飲んで居たが、酒好きの私ではあつたが、これは石油の様な感じのものでどうしても飲めなかつた。此を知つて居る村

上さんが、清酒を手に入れたからと言つて、肴を用意して一席をもうけて呉れたのである。話は終戦のこと、その後の混亂振りのことで持ち切つて居たが、やがて村上さんは兵達に向つて次の様なことを言つた。

此村に入つた兵達は大部分農家の第一の室である佛壇の間に宿泊して居るが、佛壇を尊敬するものが居ない。佛壇には佛様と其家の先祖がお祀りしてあるのだから、其家に厄介になる以上は、其家の主人に對すると同様に敬意を表すべきである。毎朝兵士仲間の僧侶が讀經をして居り、家族がお参りして居ても、兵達はその間を體の置所に困つても佛壇の前へぬかづくことをしない。日本軍は神風を待つたが、神佛の心を體して居なかつたから神佛に見離されたのである。佛壇を毎日禮拜せぬと先祖も佛も家を去られる。毎日佛壇をお守りしない家は寒々として居る。日本も寒々として來た様である。村上さんの話は敗戦くづれの兵達に冷水三斗であつた。翌日から兵達は佛壇に禮拜するし、使役にも進んで出る様になり、おかげで復員事務も早く進行するかに見へた。又不思議なことに、誰も話さないのに、近所の農家に泊つて居る兵達も其の家の佛壇に敬禮し、お經を讀める者は讀經迄もするに至つたのである。

(三)

私は今春茨城縣を訪れて、此處でも熊本縣の様な農家の生活状態を見た。先般本誌に載つた瓜連の常福寺のある所から歩いて三十分程行くと松榮村と言ふのがある。此村のすゞらん子供會から年々私

の住する鎌倉大佛殿へ大草履が奉納されるので、其の縁で、此村の婦人會と子供會から私と妻とが招請を受けたのを幸ひと出向いたのである。私の考へでは舊水戸藩の治下であるから佛教等は存しないと思つて夫婦で半ば遊山の考へで行つたが、着いて見ると、想像とは逆に熊本縣で見たと同じく家々の廣間の中心に大きな佛壇があり此れを中心に家庭生活が行はれて居る様である。熊本縣でも、訪客は必ず其家の佛壇に敬禮してから用談する様であつたが、此處でも訪問客は先づ佛壇に敬禮してから家人にあいさつをするし、客が佛壇に敬禮すると必ず家人は此れに謝意を表して居る様子である。宿所の子供達は水戸の中、高等學校へ通ふらしいが、六時頃、私共が未だ床の中に居るのに隣の室の佛壇の前に來て「りん」を鳴して居る様であつた。後で聞けば、親達も子供も五時頃から起きて女は食事の用意、男は掃除をし、子供の出掛ける時には佛壇に花も佛器も線香も供えてあるのであつて、佛壇に禮拜してから食事して出掛けるのであると言ふ。又大佛様に年々草履を奉納するすゞらん子供會では「大佛様は雨にも風にもめげずにじいつとこらえて人々を照して御出になる。私共もにんたいづよくつとめやう」と勵まし合つて居ることであり、又子供會を出た先輩團も同様であると述べられ、説教すべき私が逆に説教された形である。そして氣付いて見ると此處も亦た念佛地帯であつた。

私は東北の農村の生活を未だ見ない。然し北國も東國も九州も私の見た限りの農村の人々は念佛信仰を支柱にして勤勞精神を保つて居る様に感じられるが、どうであらうか。

勤勞感謝の日に、農家の人々に感謝すると共に、阿彌陀佛の恩德に深く思ひ到らねばならぬ様である。

働く人と信仰 實態調査

働くこと。それは人間にとつて、何と喜ばしく、又尊いことであらうか。よく「生きる爲には働かねばならない」と、何か宿命の様に言う人もある。われわれはもつと、積極的に「生きる喜びに溢れつゝ働く」ようにしたいものである。

しかし現實は決して事程左様に生易しいものではない。そこには生きる爲の闘争が日々繰り返されねばならない。一日一日のパンを得る爲に、戦ひ続けねばならない。働くとは、この戦ひである。がしかし、又われわれは、パンのみにて満足出来るであらうか。現實が厳しければそれだけ、精神の、いや「いのち」の涸渇を感じることはないであらうか。



今日の社會機構や、經濟狀況は、決して満足な状態とは云へない。そしてこのことは、又別な課題である。

此處では、今日の様な時に、働く人々はどんな精神生活をしているであらうか。これが問題である。

本誌は、こうした問題を解くため、特に東京中心の役所、會社、工場等で働く人々の實態調査をし、「働く人と信仰」についてメスを入れてみることにした。

一、一般に信仰への關心が 少ない

求めていますか。

2、その入門のいとぐちは。

3、あなたは信仰を仕事の面にどの様に生かしていますか。

1、あなたは精神生活のよりどころを何に

4、あなたは宗教的な日常行事を何かもつ

ていますか。

5、最近讀まれた宗教關係の書物は何ですか。

に亘る五項目に就いてある。

これに寄せられた解答者の大部分は工員、會社員、公吏であり、その他家庭に於ける作業的な仕事を持つ者が少しであつた。

質問事項は、その内容が抽象的であつたため全然記載のないものが全體の二十一パーセントもあつた。しかしこの事は、又「今日の政黨をどう思うか」「再軍備は是か非か」等の如き、自分にはそれ程日常深く考へていなくても解答出来る一般の輿論調査と違い、直接自己の問題であり、全然自分が考へも、又實行もしていない事等書けるものでない點、こうした白票が多かつたものと思はれる。

又たとへ考へて居るとしても仲々表現出来ない場合もあつたであらう。

こんな觀點からすると、相當多くの働く人が、信仰に對して關心が薄いと云ひ得るのではないだらうか。

しかし、それは年齢に依つて異なるのであり、今これを略表にしてみると(%)はすべて

解答總數に對するもの

年令	解答數	詳しく書いたもの	少し書いたもの	全然書かぬもの
70	1%		1%	0%
60	1%	1%		0%
50	7%	4%	3%	0%
40	9%	7%	1%	1%
30	18%	9%	6%	3%
20	39%	21%	7%	11%
10	20%	1%	13%	6%

計 記載不明 5% 43% 31% 21%

解答總數より見たパーセントで二十、三十代の人が最も多いのは、その年齢の人が最も多く工場、會社で働いている事を示している。又その記載を見ると、やはりこの年代の人が最も自己の信仰に關心を以てしている事を示しているもので、特に二十代の人々が最も關心を持つてゐる。この事は、その精神の發達期にあると共に、又思春期ゆゑに、最も精神の動盪するときであり、これを如何に解決するかと言うことが、自然こうした問題に注

意せしめるのであらう。

四十歳以後の人が、その解答數に比して、全然記載のない者の少ないのは、精神の安定を得、何等かの自己のあり方を持つて、自己の生活に處していることを示している。

勿論、全然こうした事に關心のない事は、反面、そうした事を考へる餘暇さへも持つていないと言ふ人もあるかも知れない。その日のパンを追うのが精一杯。もし、そんな人が居たとするならば、われわれは之を無視することは出来ない。

二、精神生活のよりどころ

働く人々が精神生活のよりどころを何に求めているかと云う事は、重要な問題であらう。その中百人の中二十一人迄は、全然考へて居ないと言ふ事が先ず大きな問題として考へられねばならぬ。そうした餘裕がないのか、そうした必要を感じないか、或は全然拒否しているのか、その點は不明であるが、若しこうした人々が何か精神的な大きな問題にぶつかった時には、果してどうするであらうか。そして、こうした時こそ、邪教の襲ふチャンス

スなのであらう。

そのよりどころを明記している人で佛教と書いてゐる者は、二十一%に及んでいる。中には淨土宗、日蓮宗等と明記し、更には、新興宗教の立正交正會と記載した人も二、三居た。しかし、彼等の入門の動機を見るのに、多くが「家の宗教だから」とか「親よりの教へ」とかであり、必ずしも自己の求めたものでない。習ひ性となつたものが多く、家の宗教と個人の宗教とが混亂されているものが多い。

又、病氣等を機縁として入つてゐる者も相當多い。病氣は、確かに「氣を病む」と云う如く、精神生活の大きな變動のエボックとなるものであらうが、とすると、これは又現世利益に流れ勝ちであり、純粹な信仰に入り難い。

こうした中で、二十代の青年に多いクリスト教への信仰を無視することは出来ない。新しい感覺への趣向とも云へるが、又彼等は熱烈である。そして、それは女性に於て特に多い。こうしたものが二十代にのみ見られて、他にない事が注意される。已に三十代に入る

ときは、家代々の宗教に歸つてしまふと言うか、眞の信仰ならば、そうした事はあり得ない。ここにも、一つの問題がある。

三、ゆきあたりばつたり

佛教或は宗教一般、クリスト教等と記載された以外のもので、精神生活のよりどころを何に求めているか。その二三を見てみると、随分思い切つた解答がある。

「ゆきあたりばつたり」

「自力本願」

と云うのがある。共に三十代の解答であるが、その時勝負とか、或は、あくまで自己の力で解決しようとすることは、それなりに頼もしいことであるが、果して、これで人生を乗り切る事が出来るであらうか。「ゆきあたりばつたり」で乗り切る事は、決して生易しい事でない。徹底せる樂天家か、達道者でない限り難しいのではないか。そして、そうした者程、「ゆきだおれ」になるのではあるまいか。

これに對して

「親への信頼」「子供への愛」「異性へ愛情」と言ふ解答が相當多かつた。

これは、總て本能的なものの故、最も近ずき易いものであるが、又確かに、その精神生活を安住せしめる力となるであらう。その解答に依つて、年代は自ら明瞭となるであらうがこうした愛が更に高められ、絶對者に向けられるとき、これが信仰ともなるのであらう。とするならば、こうしたものの純粹なあり方こそ、信仰への道と言へるのではあるまいか。

若い世代の解答中には、「讀書」と言うのがあつた。これは、今探求の最中である。若し彼等が求めるならば、その道は示されるであらう。しかし、働く人々の讀書の時間は餘りに少ない。そして、特に日本に於ては、そうした時間の活用が極めて下手である。この事は、讀書調査に依つて、更に明瞭にされるであらう。

四、仕事と信仰

信仰が仕事の面で、どの様に生かされているであらうか。この事は、勿論、何等かの信仰なり、精神生活のはつきりした依り所を持つた人でない限り、答える事は出来ぬわけである。そして、それ等は、仕事と云う肉體勞

働に對する精神的な助力と云う點で、どの解答も一致している。

佛教を信ずる五十三歳の主婦は、

「感謝の氣持ちで仕事面に生かしています」と答へ、禪を信ずる四十五歳の會社員は

「怯懦にならないように努力する意味で、『平常心是道』と言うことを常に考へる」と答へている。

仕事を苦と受けずして、感謝の氣持ちでやり、なまけ心のない様に「平常心」を維持すると云うことは、佛教の最も一般的な、そして、最も手近な生かし方であらう。そして、そうした生かし方が出来るとき

「明るさを保つ」(四十五歳、女、會社員)

「明るい心を求める」(二十二歳、男、會社員)

の如く、仕事を明るく、楽しく出来る事となるのであらう。

「信仰によつて、一日一日を永遠の一期なりと楽しみ、與へられた職業に仕えていきます」(二十九歳、男、會社員)

こうした仕事の考へ方は、極めて消極的な面があるとも云へるが、仕事に對する誠實は働き甲斐のある生活を樂むであらう。

「罪業消滅を念じ、道德を重んじ、商業に全力を盡している」(五十九歳、男、菓子小賣商)

この人の考へ方は、罪の意識が強く出て居る。信仰は、之が消滅と考へ、せめてもの罪亡ぼしに、仕事にはげむと云う點、何か、個人的な理由もある事であらう。

ともかく、殆んどが年齢の相當いつたものの考へ方であり、若い人には、仲々こうした考へ方にはなる事は出来ぬ様である。何事も現状に安んずる事は、よい事ではないが、その場そのに於て、全力を盡し得ぬ人には發展はないであらう。

五、日常行事

こうした人々がどんな日常行事を持つてゐるであらうか。

解答に書かれたものは、極めて簡單であり一律である。

「朝夕佛壇にお参りする」

「線香を佛様にあげる」

「先祖の靈を禮拜する」

等々である。この種の解答は、自己の信仰を

記載し得なかつた人も相當に書いている。彼等が云う佛壇とは、所謂、祖先の靈を祭るものである。そして、彼等が捧げるこれ等の禮拜や、線香は、何と言ふ事なしに漠然と、これ等祖先にあげられているのであらう。即ちここでも、家の宗教、家族の宗教としての行事が、古い封建社會からの連がりによつて、日常行事化されているのである。こうした形式も、又尊ばるべき事であるが、個人の精神生活、こうした形式の中に、どの様に確立して行くかと云う事が、更に重要な問題である。

「敬神崇祖」(四十五歳、男、印刷工)

と言ふ信仰の解答は、何か戦時中の盲目的な言葉の様でもある。

「毎朝今日一日を正しく送りたいと決心する」(二十二歳、男、會社員)

「一日一善」(四十七歳、男、會社員)

「反省」(三十五歳、男、印刷工)

等は、或る時期に自己を反省することを以て、その宗教行事としている。調査の上にも相當これは出て居る。佛壇に向つて、先祖を禮拜すると共に、又自己の生活を反省してみ

る。この事は、最もな宗教行事として、自己の信仰確定の近道ではないのであらうか。そして、「働く人々」は、せめて、朝夕のこの一時に、今日の一日をいかにあるか、そして、いかにあつたかを、靜かに反省する機会を持ちたいものである。

六、信仰書の讀書

さて、最後に、信仰書は、どんなものがあるであらうか。残念な事に、この解答は、餘りにもみじめであり、空白である。

國民佛教聖典(三十九歳、男、會社員)

淨土週報(三十九歳、男、會社員)

交正(立正交正會雜誌)(三十五歳、男、印刷工)

刷工)

淨土(法然上人讃仰會雜誌)(五十三歳、女、主婦)

主婦)

法華經月刊誌(四十歳、男、工員)

等が、その目ぼしいもので、他には殆んどない。變つたものとしては、

宗教的人間(四十四歳、男、會社員)

さいの河原の念佛本(四十五歳、男、印刷工)

工)

光のあるうちに光の中を歩け（二十三歳、
（トルストイ））

男工員○

等がある。

佛教關係や、信仰關係の著物や雜誌は決して少くはない。しかも、一體この事は何と言う事であらうか、解答者の八十パーセントが讀書をしていないと言う事は、誠に注目すべきことである。そして、解答されているものも、餘りにも、ありきたりなものである。

この事は、働く人々が、そうした讀書の餘暇を持ち得ないか、又種々なる信仰雜誌や書物を知らないか等種々理由が考へられよう。

しかし又反面、こうした信仰書の普及や、宣傳にも事かいている現在の佛教界や、宗教界の現状も無視する事は出来ない。

何時までたつても、佛教聖典らしいものが手近にない事は、度々問題にせられた事である。本誌の様な簡単なよい雑誌等は、もつともつと普及すべきでないだらうか。

七、誰が信仰をかり得るか

以上、ここでは、その調査に基づいて、色々の角度から、働く人々の信仰を調査してみ

た。しかし、それは幾度も云う様に、餘りにも期待はずれであつた。その多くの人々が、こうした事に、餘り關心を持つていないことであり、又考へていない事であつた。

今日の働く人々には、色々な問題がのしかゝつてゐる。中でも生活と言う事は、不可缺の要件であり、困難な社會や、經濟狀況のもとで、多くの苦難をなめてゐる筈である。そしてこの嵐は、或は鬭争に、或はデモにと毎日の様に赤旗がふられてゐる。しかし、われわれは、又そうした鬭争が、何か無方向で、虚脱の様でさへある。徒らに赤い旗だけが、風を切つてゐる様でもある。

そこには、世界史の一環としておかれている、歴史的な現實もあるであらう。しかし、あゝして闘う人々に、更に欲しいものは、強い信念である筈だ。大衆の歩くにまかせて、引きずられる様なデモとしてゐなさに、自己の眞の信念にもとずいた動きが欲しい。それには、精神が空であつてはならない。

この事は、單に信仰のみの問題ではない。そして、働く人々のみの問題でもない。そして、所詮それは、働く人が自分に求め、勝ち

得るものでなくてはなるまい。

以上は、本誌が行つた調査資料を分析する事によつて得られた報告である。前にも言つた様に、これは極く限られた地域の人々について行つたものである爲、決して完全なものでない。又問題もまだまだある事であらう。いや、ある見方からするならば、働く人々にはもつと切實な問題があると言うかも知れない。それは「生きる」と言う現實の問題であることであらう。

何ヶ月もストライキで、ねばり抜き、資本金家達と闘かう人々は、「生きる」事が約束されぬからである。生き得ずして何の信仰ぞやと言いうるであらう。こうした問題は、今日の日本のわれ／＼として、もつと眞剣に、そして、もつと相互的に建設すべきものがある。がしかし、消極的な意味でなしに、こうした苦しい中にも、明るく楽しい生き方をし得る道がある。闘いながらなおこれを得る道がある。信仰はそうした問題であるまいか。

X

x

✕

✕

x

✕

x



○美術の秋が来た。上野の山は、これ等観覧者で賑はつてゐる。所が審査員である横山大観翁は、「どの繪にも個性がない」と怒つて、終に今年は横山賞を出さなかつたと言う。

毎日新聞社から出している「日本の顔」と云う本には、古來からの名彫刻や繪畫が百數十葉かゝつてある。どれを見ても、實にすばらしく、一刻、一畫の中に、作者の個性と時代とが明瞭に出て居る。特に佛像彫刻等は、眉毛、目もと、口もと一つ一つが生きて生きている。「個性がはつきり出てゐる」とでも云い得るのであらうか。美の極致は一般的、普通的なものであるが、そこには特殊なものを通しての普遍化がある。こうしたものが無い平面的な美は、本當の美ではないのであらう。

○よい作品と云うものは仲々ない。武田泰淳氏の短篇集「愛と誓」が出た。中島健蔵氏は「どの短篇も

それだけに完成されてゐる」と述べ、文士の息つなぎ的作品でない事を褒めていた。人間の裏をさらけ出す様なこれ等の作面には、厭な感じさへもする人もあらうが、これが人間の姿である。

中で「約束の身體」は渡邊海旭氏のこと、「耳」は大島泰信師にも關聯あること。再讀してみても温まるものがある。時には、「稿を築く」の如き、坊さんへの諷刺もある。

○最近の新聞紙上では、死んだ、殺したと言う記事が甚だ多い。而も惡質な犯罪が横行してゐる。或る探偵作家は、「どうもこの頃われ／＼の作品がバツトしない」と嘆いてゐた。實際のものの方が小説の上を行くからである。しかし、本當にすじの通つた殺人でなしに行き當りばつたりのものが多く探偵小説の資料にはならない。そうだと大岡昇平の「野火」という小説には、フイリッピン島の敗戦の姿が目に入る様に見える。その中で、人間の命がいかに強く又尊いかと分る。これが本當なのだ。この頃の様に生命を無駄にすること、佛達になげいてゐる事であらう。

○この頃はジャズ萬能時代の様だ。どのラジオも、どの劇場もジャズだらけ。異様に高くして變調なラッパの音と、ジクザグな騒音は、どうみても、野蠻な踊りの伴奏の様で落ち着けない。あの調子にあはせて、若い聴衆が、首を振り、足で調子を取り、口笛をビュ／＼吹いて騒ぐ劇場の風景は、一種異様なものがある。

これに引きかへて、佛教音樂は又馬鹿にしめつぽく、哀調をおびすぎて、聞くのも悲しい。御殿場の保育者大會では、佛教音樂も多に論ぜられた由。そして、某先生の如きは、自分で作詞しその筋の權威に作曲してもらうとか。本當に心樂しく、生活の充實と勵みとそして、いこひを感じる音樂が、流れて欲しいものだ。

○北陸方面に旅行をすると、随分分らない方言がある。風呂に入つていて、そこの主婦が方言で「熱いですか」と尋ねる。分らぬから適爲に「有難う」と言う。又「ぬるいですか」と尋ねるから、又適當に「はい」となま返事をする。はたで女學生が笑つてゐる。言葉

の通じぬ笑ひ話である。主婦はマゴ／＼する。

言葉が通じぬ爲の失敗談は多々ある。しかし、通じようが通じまいが、人情のこまやかさは、すぐ分る。北陸の人は、一體に言葉はぶつきらぼうの爲、行動までそんなに見えるが、それでも人情はいたつて深い。

○痛いことを知つて病を知ると共に、その存在を確認する。中でも痔病は、厭と言う程それを確認する。そして、人間の一舉一動が如何にこの穴を中心に爲されてゐるかを今更の様に悟る。兎角汚らしい所として、自から遠ざけられてゐるものが實は人間の中心である。所で、人間の死と言う様なことも、その場が近くならないと、仲々氣がつかない。そして近くなると、しまつたと慌てる。その時には已に遅い。

何でもしまつたと思ふ前に、そのものを確認し、それを大事にしないと、短い一生は無になる。



“働く人と信仰” アンケート

働く場所は非常に廣い。どんな職にあつてどんな精神生活が爲されているか、それは、われわれの大きな關心に違いない。ここでは、特に各階の名士に、左の様な質問を發して夫々にお答へを頂いた。

- 1、あなたの精神生活のよりどころ
- 2、具體的に仕事の上では
- 3、最近讀まれた宗教關係の書

(掲載—五十音順)

植 松 正

(一ツ橋大學教授、刑法)

- 1、無信仰。科學的眞理をよりどころとする。しかし、反宗教的な氣持はない。絶對歸依の感情が最も有力だとは思ふが、自分にはそれが持てない。科學的眞理が一番信頼できるところである。
- 2、合理主義で解決する。
- 3、ありません。

樫 村 治 子

(N、H、K、囑託・私の本棚放送者)

- 1、聖書 法句經。
- 2、わが道をゆく。
- 3、中村天風著「眞人生の探究」「研心抄」

川 田 熊 太 郎

(東京大學教授—倫理)

- 1、法身偈や無常偈や中論の觀因緣品第一の初の二偈などに我々のゆるがぬよりどころが適切に言表はされると信じています。しかし「信仰」といふ言葉は勅修御傳には用いられているが、法然上人御自身は何處にも用いてをられないといふことを申添えさせて頂きます。
- 2、私はこの根本の信を智慧にすることを私の仕事の重要な部分としています。
- 3、大智度論の前半(卷第五十三まで)。アウグスチンの「自由意志に就いて」、「教師に就いて」など。

奥 野 信 太 郎

(慶應大學教授、中國文學)

- 1、使徒信經
- 2、自分のどんなつまらない仕事でも、それが聖寵を得ることに妨げとならないものであるやうに心がけています。しかししばしばその矛盾に苦しんでいます。
- 3、アウグスチヌスの「ソリロキア」なんべんもくりかへして讀んでいます。

岡 崎 俊 夫

(朝日新聞社勤務)

- 1、何をよりどころにしているか意識していません、が無常感が根底にあるような氣がします。
- 3、いわゆる宗教關係の本からは得るものありません。

今 東 光

(作家)

- 1、天台宗天台院の住職として佛教徒としての精神生活をして居ります。
- 2、出来るだけ宗教文學を創作したいと念願して居ります。
- 3、枚擧に遑なし。

谷 善之丞

(銀座、三笠會館)

- 1、正しく生きるものは亡びない——と云ふ信念の下に深く正法に歸依して居る。
- 2、(一)毎週金曜日の八時半より一時間全店員を集めて修養會(向上會)をやつて居る、八月末で二百四回になつた。(二)毎月十三日父母の命日に住込店員によつて讀經燒香をなし、供養の食事し佛教座談會をやる。
- 3、加藤咄堂「般若心經講話」、原田宗岳「修證義講話」、江部鴨村「自然淨土」

中 村 孝 也

(學者—國史)

- 1、觀音さまを信仰することです。
- 2、觀音信仰に關係のあるいろいろの作品を

あつめております。

- 3、觀音經を愛讀し、これに關係のある著書論文を好んで讀んでおります。

野 間 仁 根

(畫家、二科會々員)

- 1、法然、親鸞をとうして解説された佛教、先輩、知友によつて解説された信仰である
- 2、大體平明によく働いています。そうして體も丈夫である。しかしながら、いつもしくじりや失敗をくり返しています。
- 3「佛教聖典」青年版友松あきみち著、「人生と信仰」近角常觀著、「余の入信の經路」安波勳八著、眞宗聖典。

芳 賀 幸 四 郎

(東京教育大學助教授國史)

- 1、合掌の精神。これをひろげれば正しく、楽しく、仲よく。更にいえば、自覺々他、覺行圓滿。

- 2、念々正念、歩々如是。

「無相の相を相として、往くも還るもよそならず、無念の念を念として、歌うも舞うも法の聲」

- 3、立田英山著「新編碧巖集講義」

橋 本 定 善

(新橋、橋善)

- 1、先代の靈前に額かずき、毎朝のお祈りに精神の安定を見出し、夜のお祈りに一日の報告をなすことによつて精神生活のよりどころとしている。

- 2、毎朝仕事前に仕事場に安置してある諸々の神と、先祖の靈台を常に中央におき靈に仕事場全體、作業員全體が見えるようにし全員、先代にはじめよう努力している。
- 3、宗教關係の本は讀んだ事ありません。

久 松 潜 一

(東京大學教授—國文)

- 1、生死の世界を超越したい。有を起えた無の境地に入りたいといふ事を念願にして居ります。

- 2、生涯にめざした學問研究にひたる事によつて自分の生甲斐を見出したいと思ひます
- 3、姉崎博士の切支丹文學(これは日本文學史の一節に切利支丹文學を書かうとしてであります。)



工場の人々

黒い煙、逞しい騒音、閃く光線、總てこれ等は現代の表情の一つ一つである。多くの人が工場に吸い込まれ、そしてはき出されて来る。漸く戦前の活氣にと近ずいて来たこれ等工場に働く人々も、しかしながら必ずしも満たされてはいない。

“働く人々を訪ねる” — 編輯部 —

經濟的不滿、施設的不滿、そして時には勞資の對立となつて大きな赤旗がバリゲートが築かれてる。總てが生

々しい生活への闘争である。

沼津のS工場の文化部長さんを訪ねてみる。

こゝは、戦時中は軍需生産で榮えた所、今は、その苦しさがひし／＼と迫つて居る。

「文化部とはどんなことをするのですか」

「時間の餘暇をみて、レコードコレサート運動、讀書會等色々します。晝食時のレコー

ド等もその一つです」
成程、輕快な音楽が鳴り止んだ機械の靜寂の中を流れる。

「宗教的な行事は」

「まあ、讀書會の様なものの中で、聖書等を読みますね。講演會も時々やりますが。

精神訓話的なものを」

しかし、一般に、この方面への關心は極めて薄いか。第一それを考へる餘裕等そんなにない。一日の勞働を終へて、家でラジオを聞くのが勢一杯とか。しかし部長さんは、決してこうした狀況で満足しているのではない。そして、むしろ、充分時間の與へられる勤勞の間の讀書や、座談會を考へているとか。

壽司屋のおばさん

方向を轉じて、壽司屋さんに一寸顔を出す景氣のいいあんちゃんやんが「エイラッシャイ」とやる。こゝは三河島の「清すし」と云ふ所。板前さんの頭の上に、稻荷大明神が仰々しく祭つてある。五十がらみのおばさんが茶を持つて来る。一寸スイなおばさんだ。兎角こんな所の人は、信仰に凝つている人が多い。

「おばさんは何か信じているかね」

「私ですか。當家年參講と云うのがありましてね、毎月一日には、市川の弘法寺にお参りしますよ。それに十五日には修養會が

ありましてね、三十人程集ります」

聞けば日蓮信仰の講の様なものらしい。入信の動機は、両親から受けついだものらしいが、仲々熱心の様である。

「どうです。信仰すると商賣はやるでせう」

「なーに。そんなことは。唯働いていても氣持ちがよいですよ」

一寸變つた家に入り込んだものである。これは、新興宗教ではないらしい。ともかく、生活と一枚になつた様な些細な宗教がここにあるという様な氣がした。

飲み屋のマダム

「おばさんは、ずーつとこの商賣」

「とんでもない。これでも一かどのお嬢さんだつたんだよ。まあテン落の詩とでも云うところよ」

いやにテン淡としているが、又どこことなくきつい、新宿のネオンが輝やく。

「一つ話してくれないかね」

「ある大學生にはれたら種を宿されてよ、結婚してくれると思うたら、フラレてよ、とよのつまりは、男達に身を賣つたのさ。人間なんて當てにならぬと云うものよ」

「神や佛もかね」

「あの頃は、神や佛もなかつたね。にくい／＼と暮したもの、私には、神や佛は縁のないもの、すてられたものと天をのろつたが……」

「この頃はどうなんだね」

「やはり、これも宿命と諦めたさね。泣いても一生、笑つても一生だものね。お蔭でまあこうやつて、元氣な人を相手にしていや、人生も又楽しいとこよ」

「憎い人間も可愛くなるだらう」

「なーに。憎い／＼と思つたのも、所詮あそこまで行つた私が悪かつたのさ」

「今は、少しは佛でも信じるかね」

「何か縁でもありやーね……」

それは、一つの類型に過ぎない。飲み屋のマダムが皆こんなだ等と言つたら叱られるだらう。こうした人々にも、何かよい力が與へられねばならない。

農村の人々

町と違つて、農村の人々は、信仰にあつた。と言うより、その社會が持つ習慣が、自ら若い人々にまで、たとへ形の上だけでも信仰と云ふものを持たしている。それは、佐藤密雄先生の話にも書いてある。

滋賀のある所等も、朝早くから、あちこちの家から木魚の音が聞える。早起きの大人が終る頃、寢ボウの子供でも、リンを叩く事を忘れない。夕方等は一家そろつて御つとめをする。此處では佛壇に一日が始まり佛壇に一日が終ると云う事が出来よう。

「有難い、勿體ない」

と云うのが口ぐせの様になり、二口目には「南無阿彌陀佛」と出る。生きることそのことが已に極樂なのである。特に老人達は、未來の極樂往生を信じ切つてゐる。生半かじりの信仰等持つて行こうものなら、とんでもない。忽ち打ちのめされてしまふ。

こんな所には、邪教も、赤も入る餘地がない。生じつかな信仰等持つてゐると恥しくて長居出来たものでない。村の人々は明るい生活をしてゐる。物産の豊かさが更にこれを倍加している。

しかし、若い人には、只單に有難い話にのみ満足してゐない。また、未來往生のみ説く布教師に耳を傾けない。萬年ノートの様に喋る研究心のない布教師は、自然オミットされて行く。生活に根をおろし、一日一日農村生活の中にある佛の教へ、更には激しい社會や世界の中に生き行くべき道を求めている。そ

して、今は、單に若い者ばかりでなく、年々とつた人々も、次第にそうした傾向が強い。螢光燈がかどやき、テレビが入つて来る近代農村文化には、佛教も、又新らしい道行きが要求されている。

學校で働く人々

一般に先生はインテリと言はれる理屈をもつてゐる。身を以て理解する前に、頭でもつて理解し、割り切ろうとする。兎角理屈は、科學性を要求する。科學は自然、宗教と對立する。しかし、ある科學の先生は

「いや、科學の極點と、宗教の極點は、又一つです。仁科博士も湯川博士も、又中谷宇吉郎さんの様な人も、科學者ですが又立派な思想家であり、宗教家ですよ」と斷言して居た。この所は、どちらの勝負か知らぬが、學校の先生は仲々に宗教の事も詳しい。

「……研究會」「……讀書會」

佛教もキリスト教も仲々盛んである。色々な角度から之を考へる爲に、種々の學者を呼んで講習會もやる。難しい大藏經も讀んでゐる。

アンケート (二)

秀の山 勝一

(元笠置山)

- 1、良心を鏡として正しき生活をしようとしている、両親の佛前には毎朝合掌。
- 2、相撲を正しく發展さすことに全力を盡している。
- 3、戦後はまとまつた宗教關係の著書を読まぬ。

村岡 花子

(作家)

- 1、どんな時にも絶望的にならないこと。聖書を熟讀し、その意味するところをよく考えます。
- 2、一々周囲の人々の批評に氣をクサラセないようにして、自分の仕事の目標に向つて進みます。キヨホウヘンの上を行きつゝ、反省を怠らぬこと。
- 3、一八一三年にビルマへキリスト教宣教師として渡つたアメリカ人ジャドソンの傳記小説を譯しておりますので深く感動しています。

松 浦 一

(英文學者)

- 1、私の據所が大自然の大生命の美の淨土であることには元より變りはありません。これまで私が書き或は説いて來ましたものが一つとしてこの外に出たものはないことを今更ながら喜んで申したいと思ひます。
- 2、私の仕事と申せば五十年一貫した教壇生活でした。而もここにこれを一貫したものは上述のこの一味の信念でした。「萬古松風一河流、清涼山中道無窮」或時人に與へましたこれが私の述懐です。

山野 愛子

(美容師)

- 1、人にまごころをつくし、感謝の生活をおくること。
- 2、教育者としては眞心をもつて生徒を導き美容院營業主としては親切、良心的な營業と、店員の福祉に留意。
- 3、宗教關係といえるかどうか、修養書としては、「生命の實相」など、座右の書としてひまがあることに讀んでいます。



勤 勞 と 秩 序

——東洋一の刑務所府中に見る——

刑務所——といえ、ふつう高塀をめぐらした中に無氣味にもひっそりと静まりかえつた一角を豫想する。所が今月御案内する刑務所は「働く刑務所」なのである。

バスは白塵を捲いて府中刑務所前に停車する。降り立つて見ると眞直に入口に通じる道路は煉瓦疊、歩道の傍は青々と手入のよい芝生のグリーンベルトが美しい。入口が事務所で、クリーム色、三階建のビルとなつてゐる。

教育課をノックして來意をつけると、

「あゝ淨土の方ですか、淨土は毎月頂いております、さあ、どうぞ」

というわけで、極めてスムーズに話がはじまる。宗務所より本誌が全國刑務所に行つてゐるのである。

見てみると受刑者の一人が、電話を修理にくる。窓外をのんびり草を取る一團がある。どこかに野球に行かせる話が耳に入る。どうも堅くらしい刑務所という感じは適用しないようだ。

「昔と今と一番違ふ所はどこです」

「とくにありません、人格の尊重という立場に重點をおいてすべてやつてゐるわけですがね」

と二場部長は膝を乗出す。

「従つて、こちらもそうだが、彼等の間でも、室内の新入をいじめたりするボスや、罰的なことが少いです」

「彼等の希望も出来るだけ容れ、中にひそんでゐる人格の輝きを見つけてやろうと思ふんです」と羽柴さんは云う「私は通信教育が仕事の一つですが、……」

「通信教育？」

「えゝ、公認の高校、中學校、洋裁學校です」ね」「大體教育を、行刑・厚生・作業・教化・通信等の各面からやつていくわけなのです。」

「入つてゝ、勉強ができるとは、めぐまれていますね、出来ますか？」

「こちらでは作業が、朝の七時から、午後四時まで。五時から七時まで自由。七時就寢となつていますが、九時までは、ラジオ等も聞ける自由な時ですから、しようと思えば時間はある、ノート、エンピツ、本類も、一定の規準によつて使用させますからね」

「どうも七時から就寢で、讀書、ラジオ。

私共、少々羨しいですね」

と一同苦笑、

「作業はどんなふうですか」

「そうですね、一度工場を案内しましょう」と立上る羽柴さんの後をついて行く。

本廳舎から雜居房を通つて工場に行く、房舎は放射線狀の廊下の兩側にある。そこへ入る網戸をくぐれば、娑婆の風とお別れだ。廊下はコンクリートだが、まるでニスをかけたコンクリート(?)とでも云つた調子で、ピカ／＼に光つてゐる。廊下を掃除してゐる受

刑者達がなめるように磨いているのだ。

室は五、六人の名札が、かゝつており、紺色のふとんが、きちんと一隅に積上げられている。こゝの床がまた美しくふきこんである。モサイックで、一寸した應接間も顔負けの立派なもの。思わず、

「きれいですね」と口から出る。

「室内に水洗便所もついています。掃除・

衛生は嚴重で、しらみ一匹いません。たまに入ってくる人間が持ちこむ位のもので、昔の軍隊よりは其點ずつとよいわけです。」

次の建物へ渡つていく廊下の右は約千坪餘の芝生が手入れもよく行届いて廣々として氣持がよい。これだけにするには大した勞働と根氣がいるはずだ。

工場ブロックに入ると、けたまましいダイナモの音が耳を聳するばかり、初めの棟は、いはば鐵工場といったもので、鑄造、切削、検査、整理、記帳全て受刑者である。

製品は安價で丈夫というので、なか／＼注文も多いようだ。

「そうとう彼等の歩合もあるでしょうね」

「それぞれの能力に應じて與えられています。一級、二級、三級というふうです。いゝのは、一月千圓というのが、まれにあります。

中には封筒張りも出来ないのもありますがね、もつとも腕があれば、ここへ來ることもないわけです。」

「しかし、こゝで働く習慣と技術を身につけ、なにがしの資金を持つて出所するとなれば、何よりの贈物になるでしょうね。」

「こちらのお膳立通りには、なか／＼ね」と聊か淋しそう。

入浴場へ向ふ一團とすれちがう。丸坊主だこゝで丸坊主は受刑者という事になる。丸坊主の記者は慌てゝ帽子をかぶりなおす。

工場の前には、いくつかの花壇が設けてある。

「あの花壇は毎年丹精して、一流の造園家を招いてコンクールをやるのです、あれが一等で、こちらが二等です。」

話しながら、どん／＼工場の前の廊下を歩む。木工、裁縫、製靴、印刷等一通りのものはある。大島紡を澤山で織っている一棟もある。

こうなると刑務所というより工場といった方がいい位である。彼等は大部分を工場で過ごし、後は房で休むという日々を送るのだ。勞働を樂しむ者には不正なく、秩序を守る者には犯罪なしという指導が、受刑者の上に強く

注がれている感じである。

工場を一巡して出抜けると大きな倉庫がある。貨車の引込み線までついている。

獨房舎の前は大きな野球場があつて、草一本生えていない。ここの職員の野球チームは強く、此夏も關東で職業人野球大會で優勝している。そのためか、受刑者のレクリエーションにも大に有意義に使われている。

「野球大會を春秋二回やります、そのため週二時間をさきませんが、勤勞意欲も大へん上り、大に楽しんでいきます。ひじょうに明るい氣分に満ち満ちて來ますね」

もとの教育課に戻る。前は放送室で、獨房、雜居房、工場と、ボタンがある。

「ニュースも新聞から適當に採つて係員が流しています。夜七時から九時まで各房でスィッチをいれて聞けます。」

「宗教關係の話は」

「これは一月二回、キリスト教と佛教とに分けて自由に聞かせておりますが、それぞれ千名、六百名程聞いています。もつと講師方に来て頂きたいのですが、遠方で、豫算もありませんしね」

「いや、其なら、當會でも出来るだけ御援助させて頂きましょう」と協力方を述べて歸る。(R)

泣くことも、怒ることも、念俾申すこともみな人間の叫びである。しかし死に直面した人の叫び程悲しくも又恐ろしく、そして哀れなものはない。

最近出た加賀尾秀忍著「モンテ・ナルバに祈る」は、こうした人間の叫びを傳へて切々たるものがある。兎角、ヤンヤと騒ぐ聲に乗じて、商魂たくましく出て来る出版物には、善いものはない。しかしこの書は、つまらぬ名士の序文を除けば、人間愛に満ちて、まごころから謙虚に人間の叫びを傳へたものだ。

教誨師とは、死刑を宣告されたものに對して、如何に心安く死地に趣かしめるかと云ふ事をその役とするかの如く考へられている。そして、多くの教誨師は、この事をあたかも天職の如く、見事にやつてのける。

しかし、いかに悟つた人間といえども、誰が死ぬことを喜ぶであ

らうか。いや人間なれば、一刻一秒たりとも生きる事を願はぬ者はない。それ故にこそ、刑場の露と消えるまで一喜一憂してもだえるのである。

著者はこの事を最もよく知る宗教家だ。それ故にこそ血みどろの諸願運動が續けられた。あゝ、し

い。しかし、大聲をあげて「天皇陛下萬歳」と叫んだ人々の聲には何か、うつろな響きがしてならない。追ひつめられた人間の、虚脱状態を思はざるを得ない。彼等が

冷靜であればある程、長い戦争の間に形成された、變り果てた人間の姿を見ざるを得ない。そして、

を發する餘裕はない。靜かに、長くある時間待つて死に臨む人が抗すべからざる力とは知りながら抗する所に、本當の人間の叫びがある筈である。

著者は、唯ありのまゝをありのまゝにそして、自己のまごころさへも時折披瀝しつゝ綴つて行く。

それは限りない人間愛である。そして、鐵窓には猶多くの人々が、これに似た人間の叫びを胸に秘めて沈んだ日々を送つてゐる。

それは戦争が残した滓に違いないが、同じ人間の血を受けたわれわれとして、又悲しい心の記録である。

人間が人間を裁く。

許されざる絶對者への冒瀆ではないか。

いつまでも、こんな状態が平然と維持さるべきではない。

(Y)

評 書

人間の叫び

かし、抗すべからざる或る力が、

彼の小さな力ではいかんともする

事出來ずに迫つたとき、始めて彼

は、彼等を心安く死地に導く事を

餘儀なくされた。そして、終に彼

の精魂はつき果てた。

十四人の死への姿。それは、誰しも涙無くしては讀む事が出來な

著者が激賞するにも苟らず、或る

精神の異狀さへも見る。

これに引きかへ「残念です」と

涙ながらに登臺し、口には出さね

ど、その動作に死を拒否する人の

姿の中に、人間の本當の叫びを見

ざるを得ない。突然の異變に會つて死に行く人の心には、この叫び

臺灣とセイロンの佛教

杉 本 信 雄

このところ佛教徒の世界文化への貢献は活潑、積極化してきた。佛教はようやく太平の眠りから覺めた觀があり、佛教徒であると否とを問わず、誠に喜ばしいことである。

こゝに佛教が世界的課題として、強く要求されている現在、いろいろな意味で、中國佛教の正統を踏むと考えられる臺灣の佛教界及び純粹佛教のホームとして、知られているセイロン佛教の現況を見聞するのも決して無意味なことではないだろう。

臺灣の佛教界

現在中共の支配下に置かれている中國大陸の佛教は、全く往時の面影はない。著名な寺院は、破壊焼失され、或いは政府の使用下にある一方、若い向學の僧侶は、大方兵隊に採られ、意氣消沈の態であるといわれている。

佛陀への信仰で世界平和と人類の繁榮を圖ろうとする世界佛教徒會議が、千九百五十年セイロンで行われたのを初めとして、昨年九月には、十八ヶ國の佛教徒代表が、東京に參集し、華々しく第二回を持ち、それに續く第三回は、來年ビルマで計畫されているなど、

それに臺灣在來の法師とが、日夜その再建に努力している。全島の寺院數は、大體六百から一千といわれ、小さい廟まで含めると、かなりの數にのぼるが、最近は佛教會に所屬する支會（各縣單位で十七ヶ所）分會も漸次増加している傾向である。これらの寺院、僧侶たちは、その目標として現在の佛教を中國本來のものに、乗せることを主眼にし、佛教教育と、佛教文化に力をいれて、その正しい普及と、人材の養成等、系統だつた佛教の再現に努めているが、それと共に、一般市民の生活と密接なる事柄をとらえ、分かり易く佛の道を説くことを忘れず、強力な布教に乗出し、ているその効果の表われか、最近は總人口の八十パーセント近くが佛教を信じていると、臺灣省佛教會は、報告している。しかしこれらの信者の多くは日本統治下の一つの特色であつた、神佛混交の形で佛教を理解、信じている面が多分に伺えるのである。

佛教活動や寺院の財政的な面について見る寺の維持費は、ほとんど信徒の寄附で賄つてゐる。臺北で有名な正統派の善道寺の例を見ると二千名の信徒から毎月二元（約四百圓）

ずつ得ているので、維持費にも佛教活動にもこと缺かゝらない。なお臺灣の宗教界の特色としては、日本の如き、新興宗教は全く見られないと、そして佛教、回教、キリスト教、天理教などからなる宗教會連宜會という協同組織を持ち、門閥争いが、激しいといわれる宗教界としては珍しい特色を示し、宗教で民政を安定して行こうという、新しい意欲が出ていることである。

セイロン佛教界

セイロン佛教は千九百四十八年、セイロンが獨立してから多數の有識者の間に信者を持つと共に、政治、文化の面に力を持ちだし、議會の議席の大多數が佛教徒で占められるようになった。それは佛教が世界平和を持ち出す重要なカギであるとの氣持が、佛教徒ばかりでなく、一般、有識者、學者の間に起つて來たことである。そしてその具體的な表われとして生れたのが、第一回世界佛教徒會議となつたものである。

セイロンはお釋迦さまの舍利がまつてあるということから、民衆の間にも佛教が尊ばれ

ているという現象も多分にあるが、佛教會としては積極的に教育面に働きかけているのでその力が、馬鹿にならないものになつてゐる。宗教教育としては、宗教を學校の課目中に特別課程として入れている。無論佛教系の學校は、必修として佛教を教えているが、一般、或いは、キリスト教の學校でも、佛教は一應の基礎的なものとして教えている。そして、宗教教育の一助としては毎年、宗教に關する試験が行われ優秀なものは表賞される政治面に於ては、獨立前の千九百三十一年でさえも、議席の七十パーセントで、信者は全人口の八十二パーセントを占め、政治團體の大方が主義の如何をとわず、一應佛教を信じているという面白い形をとつていた。以來佛教徒の政治に對する聲は、次第に昂つて來てゐるとのこと。しかし、これらの積極的な教育、政治への働きかけ、介入によつて不當な影響が生じているかという返えつて、民生安定の具體的な形となつて現われ、國民生活に深い安心感を持たせている好結果を與えているのである。

(毎日新聞社學生新聞編集員)

インド舞踊

聞きなれない調子の音楽にあわせて、はだかに目もまばゆいばかりの飾りをつけて、一人の男が踊つてゐる。兩手の五本の指が、何かにあやつられてゐる様にくねくねと動く。からだのこなしや、足の動き、さては踊り全體が、この五本の指の動きをうつしながら、それを中心に向いてゐると言つてもよい。

インド舞踊はそんなに表現出來そうだ。靜あり、動あり、動中靜、靜中動。それはすべてこの指にある。「印相」に含む意味が分る様である。手が物を言つてゐるのである。

この等の踊りは、すべて宗教から來てゐる。神佛に捧げる踊りである。それ故に、踊りの前後に咒文を唱える。又位の卑しい者はできない。神聖であり、莊嚴なゆえんである。

上野松坂屋での大印度展覽會の一こまであるが、踊る人は合掌で出て來て、合掌しつゝ、拍子に送られて入る。合掌は人間の無垢な姿であり、美しい踊りでもある。

○

○



教 開 の 邊 北

應 博 上 石

一人
和人の渡來したという鎌倉時代の北海道は蝦夷地といつて、其の頃は北海道史に據りますと、罪人の流刑地であつたといふことでもあります。

然るに時代の降下と共に、本土から漁業其の他の目的で渡來する和人が非常に多くなり、其のなかに各宗の僧侶も交つていたといはれ、特に日蓮宗の僧日持は最も早く、蝦夷の地を踏んだ僧の一人として、知られております。

この僧日持が渡來しましてから、約二百年の間は、知名の僧が渡島した史實がないので、多數の僧侶が渡島していることゝは思いますが、遺憾乍らこれを知ることが出来ません。

然しながら、わが浄土宗の念佛行者が、道南地方の箱館——今の函館に住んでいたことを裏書する貞治の碑というのが、函館の稱名寺境内に現存しております。これは寶曆二年八月、樺基という人が箱館の大町に於て、山

際に井戸を掘りましたら、地のなかゝら、

方一尺五寸ばかりの丹塗りの祠に入つた鬘隨並びに革甲の金具の附いた大長刀、四方に九曜の紋を鏤ばめた木瓜鐔を持つた大刀などと共に出土したもので、此の碑は

高さ三尺五寸、横二尺八寸、碑面中央に竪線を入れ、右の上には阿彌陀來迎の僧と、其の下部に老若男女が人二蹲踞し、信心の誠を捧げている姿を刻し、左方には右と同じ構圖にて阿彌陀佛の白毫より光明攝取の相を刻し、最下部に

貞治六年丁未二月日 且那道阿慈父慈母同尼公

と五行の刻線があります。

此の古碑は、疑いもなく、當時浄土教の流布、開教がこの地方に行はれていたことを物語るものだ、といはれております。

一體浄土宗の蝦夷地への傳播は、記録の微すべきものがないので、的確に何時の時代と知することは、現在のところでは困難だといはれておりますが、相當ふるく承安五年開宗後實に百九十年にはもう蝦夷地に渡つてゐるよゝうに思はれます。色々研究の餘地もありませ

うが、わが浄土宗の開教流布の時代をこの貞治の碑あたりに於て、稿を進めることにしませう。

二

この貞治の碑に刻銘された貞治時代は、この碑の發掘された箱館地方を安東氏が鎌倉治府の依頼をうけて支配していたところから、これを安東氏の時代と、史家はいつております。

この安東氏の時代は、安東氏が津輕に在つて、蝦夷地を管領してから、蠣崎慶廣が上絡して、豊臣秀吉に謁し、安東氏に離れて獨立するまでの三百七、八十年に亘る間を、指しているのがありますが、此の時代は日本佛教史上特筆すべき新教宣布、舊教建直しの時期でありまして、其の影響はひとり本土ばかりでなく、新開地であつて、布教の最も効果的な蝦夷地へも及び、稍々和人の勢力が浸潤しかけた本道南地方の各地に、各宗が擧つて教線を布き初めたのも、此の時代であります。

然るに前にも述べたように、蠣崎慶廣の大館移住前の蝦夷地に於ける教界の状況を説明

する資料が乏しくて、其の後に於ても各宗の開教状況は、蠣崎氏の歸依を得た曹洞宗がひとり隆盛を極め、前に安東氏並びに蠣崎氏の歸依支持を受けた眞言宗が、僅に現状を維持しているに過ぎない状態にあつたことだけは知ることが出来ます。

そして新教では日蓮宗の渡來のふり割に積極的な活動がなかつたためか、比較的普及せず、わが浄土宗に至つては、其の流入が一向宗より稍々遅れていたというようなことを知るに過ぎないのであります。

そんな譯で、浄土宗の本道開教も、大館に丹後屋丹下という人が一寺即ち正行寺を創設して、鐵莊和尚を開山にしたあたりから、本格的な開教を開始したものと思想される節があります。

この安東氏時代の寺院の増加は相當數に上つたようではありますが、蝦夷の亂や大館合戦等のため、何れも戦禍を蒙つて廢絶に歸したものが多かつたと伝えられております。此の時代から遡つて資料の乏しいのも、其のためであらうと思ひます。

このことは愚意三心雜言集のなかに

「此のため二百餘年以前には、東西四十里の間に、民家軒を並べしかば寺社多くありしと

長祿、永正の亂に廢絶して十が一つ残りし云々」

とあるように、其の多くは廢絶しましたが、其の後年を経るに従つて、再建復興されたのも、尠くありません。

わが浄土宗に於ても、大館に永祿十年に正行寺が創建せられ、更に天正三年には光善寺の建立を見るに至りました。この兩寺の建立によつて、わが浄土宗の教線伸張は次第に活潑になつたと見るのは、當時蝦夷地の首邑であつた松前を中心にして、江尻、箱館に至る沿岸の所謂道南地方一帯に、其の末寺が建立されているのによつて想像することが出来ませう。

(つゞく)

品切

佐藤賢順著

信仰への導き

隨想二題

齋藤 昭俊

虱

いろは歌留多に、大徳が虱に喰はれたことがないなら喰はせものだと言っている。大徳だつて人間なら虱にも喰はれようし、その虱を體からわけせもしよう。だが近頃衛生思想の普及かDDTの効力か、仲々もつて虱などには見參出來かねる。

ともあれ、虱と大徳は多分に人間味をたゞよわせる。恐らく近頃の大徳は虱の味を知らないのかも知れない。救世済民をやらないところを見ると。我利我利亡者ばかり、よりによつて集まりも集まつた。これはある佛教團のことを考へてもらつてもよい。

人のことより自分のことが先。それもよからう。道元禪師はさういう型の人でなかつた。彼はある日、絹二匹もらつた。早速に米と交換しようと思ふ。そこへ乞食が來て物を乞うた。彼は早速絹二匹をくれる。それを見た弟子は驚いた。吾々の飯はどうなるんだらうと。

少しでももてば與へる人がある。この型の人皆宗教家になればよい。宗教を賣りものにする我利我利亡者は宗教屋である。さうだとすると宗教家は少數で、宗教屋が大多數を占める。

漱石先生は我を通せば窮屈だ。とかくこの世は住みにくい。住みにくさが嵩じると引越したくなる。何處へ引越しても向う三軒兩隣りがある限りだめだ。と悟つた。この悟りは一大決意だ。生きるか死ぬかである。漱石先生は何れを選んだかは明らかである。死んだつまり己れを殺した。明らかに自殺である。

そんな馬鹿なとはてなざるな。

——嘘のことではない。彼の生命は則天去私にあつた。

だが自殺はむづかしいようだ。論より證據自殺未遂が三面記事を賑している。だから新聞にのらない。

自殺も難かしいだらうせめて自殺の出來ない人達は虱とでも遊んだらよい。虱はどこにでもいる。

わからない人

「大菩薩峠」で机龍之助がある巡禮の親爺を切る。何故切つたのか分らない。何處までいつても分らない。だから精神異常者と極めなくなる。さうなのか、さうでないのかも分らない。

人間は多分に分らない心理をもつ。

だから魅力があるとも云へる。

あきがくるのは、みんな分つたと思うからである。決して凡てが分るものではない。分つたと思つたら大間違ひ。そんな單純なものは一つもない。

早合點、早呑み込みではないにしろ、とにかく終止符を打ちたがる。一應けりをつけたい。

時は永遠、すべて永遠に歸する。未來永劫に通ずる。

果てがない。人間の葛藤も、何事も。

分らない人も永遠に分らない人でありたい人間は永遠なるものに魅力を感じる。分らないもの、永遠なもの、それに魅力がある。

保育の欄

○浄土宗保育連盟（以下浄保連と略）の調査によると、東京都内の佛教保育機關八十の中、四十が、本宗で、甚だ活潑である。

○従つて、浄保連は、九州は裏辻氏、中部は松濤氏を中心に、各地の動きのあるなかでも、東京支部は例月園長會を持ち、積極的に研究を行つてゐる。

○同支部十月例會は、下旬世田ヶ谷區慶元寺に於て、鮎狩を兼ねて行ふ。

○東京の赤坂、陸奥、みなと、専修、芝、善光の六幼稚園全職員の研究サークルは、各季毎に懇話會形式で開かれ、秋季は、九月十二日、みなと幼稚園で、秋の行事、暖房等について、話し合つた。

○文京區明照幼稚園では、十月二十二日午後二時、教育大の辰野氏に「テストについてのお話」を開く。

○本欄の記事をお待ちしております。ハガキにて、當編輯部宛お送り下さい。

芝園だより

○秋は何かと忙しい時です。寺ではお十夜、學校では種々の學會、そして農家では收穫時。何もかもが忙する時です。この浄土も忙りの一つとして特輯をしてみました。いろ／＼と御批判下さい。

○浄土の各先生方は、學會の爲、あちらこちらにと御出張にて大變なことです。十一月の教學大會でも全國から皆様がお集りと存じ、楽しみにしています。そんなときには是非浄土編輯にもお立ち寄り下さい。（竹中）

○間もなく勤勞感謝の日がまいります。この機會に「勤勞と信仰」について特輯し、「働く」ということについて、反省をしてみることになりました。われ／＼の生活が「勤勞」を離れてはならないとすれば、それと精神生活とはどの様にあり、又あらねばならぬかと言ふことを考えるべきだと思ひます。これはそのこゝろみの一つです。

○各先生方や多くの人々の御協力によりこの特輯が出来ました。厚く御禮申し上げます。佐藤密雄先生には佛教家の立場より、村田嘉久子女史には、藝術家としての立場から、この問題を考えて頂きました。御精讀願います。

○芝幼稚園も驚く程立派に出来上り、去る九月二十五日、椎尾僧正等御臨席にて、盛大な開園式が行われました。

○兵庫から誌友赤尾敏弘氏、高校生をつれての久方の御上京。何せ忙しい旅行とて、話す機會も持てず残念。それでも電話で話しは出来ました。

○業務係、梅津氏の活躍で宣傳の實大いに上りつゝあります。皆様も御協力願います。

○保育欄が設けられました。その月の行事豫告、新しい企畫、參考意見、その他何にても、保育に關係あるニュースをどし／＼お送り下さい。

○清々しい秋と言ふのに、小生少し身體の一部故障にて、皆様に迷惑かけましたが、大いに頑張つています。他事乍ら御休心を。

（安居）

○安居君珍らしく一寸神妙に入院見舞に来るものが異口同音に、たまには落ついてよかろうと云うのだそう。落ついてくれたおかげで本號と相成つた。快方に向つてゐるから御安心を。

○佐藤密雄、竹中兩先生、十月十、十一日京都宗教學大會にお出か

け、日頃の研究を示された。

○宗學大會は十一月七、八日、事務所にて行われるが、一般研究發表は二十名に及ぶ盛況である。

○來月號は讀書の特輯を企畫しました。入門書の紹介は會員各位の御問合せにも應えるものです。御期待下さい。

○發行が遅れておりますが、來月號は十一月十日頃の豫定です。（龍海）

誌代 會費半ヶ年二百圓、一年四百圓（十共）。每號定價三十圓。前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年九月廿五日印刷
昭和廿八年十月十五日發行

（定價三十圓）

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人遺仰會

東京都千代田區神田保町三ノ十
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
電・芝（四三）一三二八

須藤隆仙著

北海道佛教史の研究

明治以前創立寺院の年代的考察等二十二篇

頒價 送料共 百五十圓

函館市船見町

申込所

稱名寺

振替 函館一四〇一番

念珠司

岩田圭秀商店

東京都豊島區巢鴨二ノ五〇

(とげぬき地藏尊後・染井墓地入口)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十八年九月廿五日印刷 昭和二十八年十月十五日發行

第十九卷

十月號

浄土トラクト

B六、十六頁 價十圓送八圓
五十部以上 二割引
百部以上 二割引

浄土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知っておきたい「浄土」の
みおしえ・みほとけのこと・お念佛・信徒のつとめ・
其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけさ・佛式作法一通
りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文

(再版出來)

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、
かんでくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

浄土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上、八圓
三百以上 一、五圓
送、五十部 每八圓

大野法道著

五重の^{こじゅう}話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を傳え、
どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説さ
れたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本とし
て大へんよろこばれています。

定價金三拾圓(送料四圓)

會仰鑽上人然法